

# 今金町の遺跡

北海道今金町遺跡分布調査報告書

1989

北海道今金町教育委員会



## 序

このたび、昭和62年から2カ年にわたり国の補助金を得ながら今金町教育委員会が主体となり実施した町内遺跡分布調査の成果をふまえ、その報告書を発刊する運びとなりました。

本町における本格的な考古学的調査は、現在建設が進められている美利河ダムの工事に伴って始められました。中でも、昭和58年から2年次にわたり、発掘調査が行なわれた美利河1遺跡は、質・量ともに優れた出土遺物によって、内外の研究者から注目を浴びております。また、この調査により町民の目が文化財に向かされることになりました。

本町では、国営・道営の農地開発により、生産基盤の規模拡大、土地改良、および生産基盤の整備を推進しており、また、平成2年に予定されている美利河ダムの完成に伴い、その周辺整備計画が具体化されようとしています。これらの開発行為には、先人が遺したかけがえのない文化的、歴史的遺産が失われてゆく危険性も含んでいます。

各種開発行為に万全を期し、遺跡の保護を行政的にはかるには、埋蔵文化財包蔵地の所在を明らかにし、遺跡分布図および遺跡台帳の作成などの基礎的データを整備することが急務であります。今回の調査のねらいはここにあり、今後、整備された資料をもとに、地域住民や事業者への周知の徹底につとめ、町内の遺跡の保護に一層努めてまいります。町民の皆様の深いご理解とご協力をお願いするものです。

最後に調査にあたり、全面的にご協力をいただいた松谷純一、幹子御夫妻に対し深く敬意を表するものであります。また、土地所有者の方々をはじめ、北海道教育庁文化課など多数の方々の深いご理解とご協力に対し、衷心より謝意を表するとともに、本書が多くの方々に活用され、埋蔵文化財保護思想の高揚の一助ともなることを祈念し、発刊の序といたします。

平成元年3月

北海道瀬棚郡今金町教育委員会

教育長 遠藤正光



## 例　　言

1. 本書は北海道瀬棚郡今金町教育委員会が行なった町内遺跡分布調査の報告書である。
2. 調査は昭和62、63年の2ヵ年にわたり、国の補助金を得て行なわれた。
3. 調査主体は今金町教育委員会であり、調査・整理は今金町教育委員会学芸員寺崎康史が担当し、調査員として松谷純一、松谷幹子氏を委嘱し、協力を得た。
4. 調査にあたっては文化庁、北海道教育庁の指導のもとに実施した。美利河1遺跡の範囲確認調査に際しては、現地にて文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官山崎信二氏、同須田勉氏、北海道教育庁文化課主幹竹田輝雄氏からご指導を賜った。
5. 本書の編集・執筆は寺崎が行なった。本書の写真是、野外のものを寺崎、遺物を菊池慈人氏が撮影した。
6. 美利河1遺跡の範囲確認調査は次の諸氏所有地を対象としたものである。調査について承諾され、ご協力を頂いた諸氏に対し、銘記して謝意を表す。(敬称略)  
広田儀一、宮越哲夫、高松トヨ、佐藤美男、佐藤幸雄。
7. 調査・整理・報告書作成には下記の機関ならびに諸氏より協力と助言を賜った。銘記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)  
天野哲也、石川 朗、稻田孝司、遠藤香澄、黄 懇文、大沼忠春、加藤晋平、鎌田 望、木村尚俊、木村英明、日下 敏、越田賢一郎、小林達雄、齊藤邦典、柴田信一、高橋和樹、田口尚、館野 孝、種市幸生、千代 駿、長沼 孝、中村福彦、畑 宏明、花岡正光、前田正憲、松崎水穂、松沢亜生、三浦孝一、三浦正人、苗 雅軍、本吉春雄、森 広樹、森田知忠、矢野牧夫、A. P. ジェレビヤンコ、R. A. ワシリエフスキイ、V. L. モロージン、E. L. ラブロフ、A. V. マルキン(ソヴィエト科学アカデミー歴史・文献・哲学研究所)、文化庁、北海道教育委員会、財団法人北海道埋蔵文化財センター、北海道開発建設局函館開発建設部、今金営林署、今金町森林組合、今金山岳会、美利河海牛化石調査研究会。

# 目 次

## 序

## 例言

I 調査の概要 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の目的と方法および経過 .....	1
II 今金町の遺跡 .....	3
1. 今金町の地形と遺跡の概要 .....	3
2. 神丘・鈴岡地区の遺跡 .....	6
3. 田代・八東・白石地区の遺跡 .....	11
4. 種川地区の遺跡 .....	13
5. 住吉地区的遺跡 .....	16
6. 中里・花石地区的遺跡 .....	17
7. 美利河地区的遺跡 .....	18
8. その他の地区的遺跡 .....	20
III 美利河1遺跡範囲確認調査 .....	21
1. 遺跡の概要 .....	21
2. 調査区の設定と調査方法 .....	21
3. 昭和62年度の調査 .....	22
4. 昭和63年度の調査 .....	22
5. 調査の結果 .....	30
IV まとめ .....	31
引用・参考文献 .....	32
写真図版 .....	

# 挿 図 目 次

図1 今金町の位置と遺跡分布 .....	2
図2 神丘・鈴岡地区的遺跡分布 .....	7
図3 田代・八東・白石地区的遺跡分布 .....	12
図4 種川地区的遺跡分布 .....	14
図5 住吉地区的遺跡分布 .....	16
図6 中里・花石地区的遺跡分布 .....	17
図7 美利河地区的遺跡分布 .....	19
図8 その他の地区的遺跡分布 .....	20
図9 美利河1遺跡の調査区と周辺の地形 .....	23
図10 昭和62年度の調査区と土層柱状図 .....	26
図11 昭和63年度の調査区と土層柱状図 .....	27
図12 美利河1遺跡の石器(1) .....	28

図13 美利河1遺跡の石器(2) .....	29
図14 美利河1遺跡の推定範囲 .....	30

## 表 目 次

表1 今金町埋蔵文化財包蔵地一覧(1) .....	4
表2 今金町埋蔵文化財包蔵地一覧(2) .....	5
表3 美利河1遺跡試掘ピット別遺物出土点数 .....	25

## 写 真 図 版

図版1-1 神丘地区の段丘面遠景	
-2 神丘8遺跡のある段丘面遠景	
図版2-1 田代地区の段丘面遠景	
-2 種川1遺跡のある段丘面遠景	
図版3-1 美利河1遺跡遠景	
-2 美利河1遺跡遠景	
図版4-1 美利河1遺跡昭和62年度調査区近景	
-2 美利河1遺跡昭和62年度調査区近景	
-3 美利河1遺跡発掘地点の現況	
図版5-1 美利河1遺跡昭和63年度調査区遠景	
-2 昭和62年度調査の状況	
-3 昭和62年度調査の状況	
-4 昭和62年度地形測量の状況	
-5 昭和63年度調査の状況	
図版6 美利河1遺跡試掘ピットの土層と遺物出土状況	
図版7 町内各遺跡の採集遺物(1)	
図版8 町内各遺跡の採集遺物(2)	
図版9 町内各遺跡の採集遺物(3)	
図版10 美利河1遺跡範囲確認調査の石器(1)	
図版11 美利河1遺跡範囲確認調査の石器(2)	



# I 調査の概要

## 1 調査に至る経緯

今金町は渡島半島中央部に位置し、北海道檜山支庁管内北端の内陸の町である。東は長万部町、西は北檜山町、南は八雲町に接している。また、北は長万部岳に連なる山地の尾根を境に島牧村と境界を画している。東西約27km、南北約35kmで、面積が570km<sup>2</sup>に達する、檜山支庁管内ではもっとも広い町である。本町の主要産業は、農業、酪農および林業が基幹となっており、なかでも、稻作を中心とした農業は全就業者人口の37%を占めている。

本町では、より近代的な営農をめざし、国営・道営の農地開発により生産基盤の規模拡大、土地改良、生産基盤整備等が推進されている。また、本町の北東部に位置する美利河地区では、現在ダム建設が進められており、平成2年の完成予定後は、ダム周辺の整備事業も計画されている。

今金町教育委員会では埋蔵文化財保護の立場から、これらの開発行為に万全を期すために、町内全域の遺跡の分布と現状をより正確に把握することが急務であると判断し、遺跡の分布調査を実施した。

## 2 分布調査の目的と方法および経過

分布調査は、徒歩による所在確認調査と試掘を伴う範囲確認調査により実施した。

所在確認調査は町内の周知の埋蔵文化財包蔵地の他に新しい包蔵地の所在の確認を行ない、より詳細な遺跡台帳、遺跡地図を作成し、埋蔵文化財の保護、保存をはかることを目的としている。調査は徒歩により、全町内をくまなく踏査し、新しい遺跡の発見につとめた。発見した遺跡は、今金町森林組合より借用、複製した1/5,000地形地番合成図に記入し、その範囲のわかるものは、できるだけ詳細に記録することとした。

範囲確認調査は、美利河1遺跡が所在する丘陵一帯約163,000m<sup>2</sup>を調査対象とし、遺跡の拡がりを面的にとらえることを目的とした。1m四方の試掘ピットを人力により掘出し、調査の目的から、包含層の遺物の取り上げはできるだけひかえ、出土層位の確認を行ない、土層の断面図をスケッチし、埋め戻した。昭和62年度については試掘調査後、平板による地形測量を行ない、1/500の地形図を作成した。昭和63年度の調査区は笹、雑木が密生しており地形測量は不可能であった。年度別の調査経過の概略は以下のとおり。

○昭和62年度 4月20日より5月14日まで所在確認調査を種川、稲穂、住吉、奥沢、中里、花石、宮島、美利河各地区について実施する。これにより新発見の遺跡13ヶ所を確認する。

美利河1遺跡の範囲確認調査を9月21日から10月13日まで実施し、引き続き地形測量を5日間行ない10月26日に終了した。

3月1日より表面採集遺物、範囲確認調査出土遺物の水洗い、注記を行ない、新発見の遺跡の地籍、土地所有者の確認作業を行なった。

○昭和63年度 4月18日より5月10日まで、神丘、鈴岡、御影、豊田、金原、鈴金、八束、田代、白石、日進、旭台各地区について所在確認調査を実施し、新発見の遺跡25ヶ所を確認した。

9月28日から10月20日まで美利河1遺跡の範囲確認調査を実施した。

1月6日より表面採集および美利河1遺跡出土遺物の水洗・注記作業を行ない、最終的に遺跡台帳・遺跡地図を作成し、並行して報告書作成を行なった。

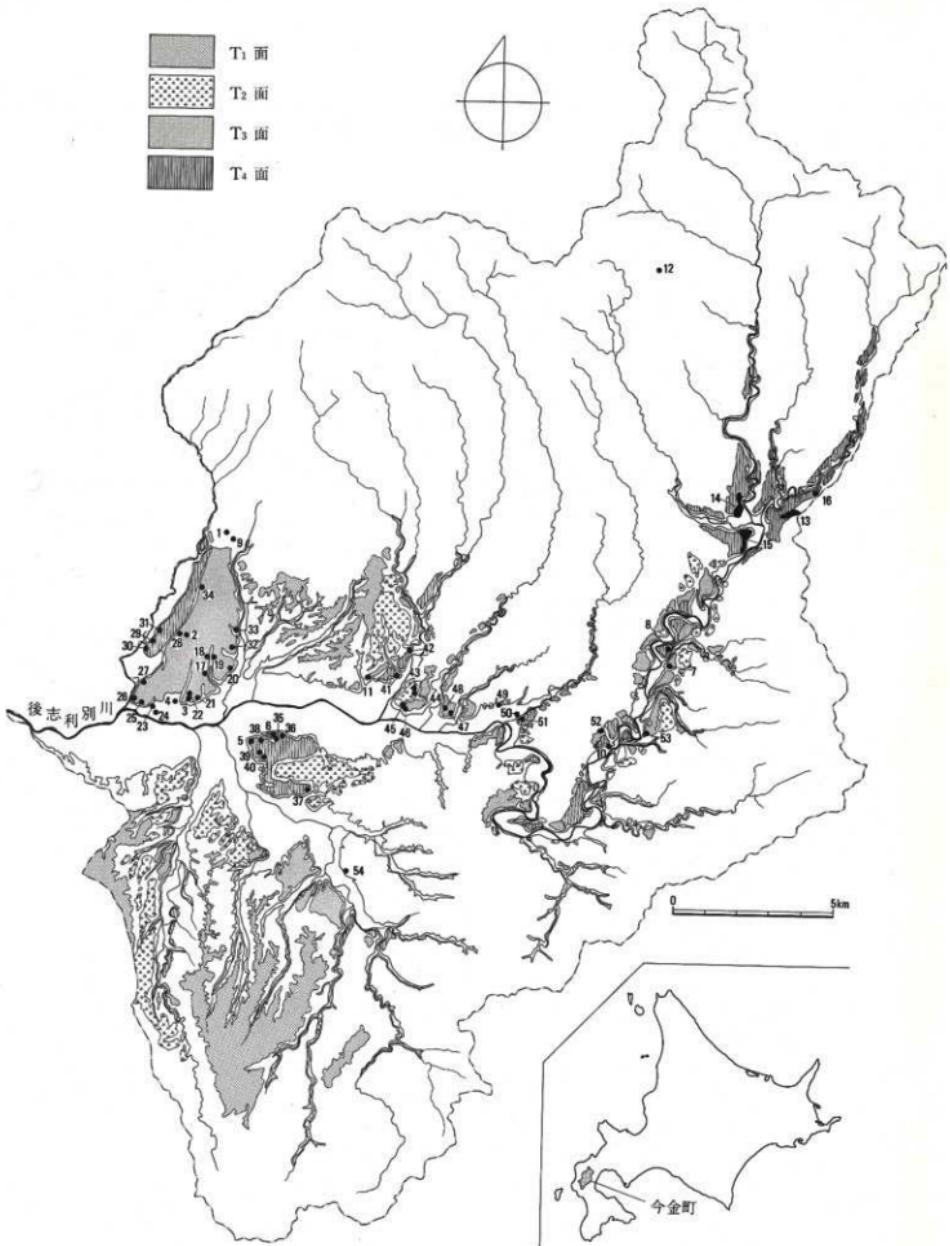
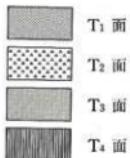


図1 今金町の位置と遺跡分布

## II 今金町の遺跡

### 1 今金町の地形と遺跡の概要

渡島半島第一の長流である後志利別川は、長万部岳に発して南流し、今金町市街の南を東西に貫流している。今金町中～南部を中心とする地域は、台地を主とする盆地状の平野をなしており、この平野の南側と北側にはそれぞれ1,000～1,500m級の標高をもった遊楽部山地、狩場山地をひかえている。

今金町の地形は大きく、(1)200m以上のおよび主に花崗閃緑岩などの基盤岩類および新第三紀の火山岩類よりなる山地、(2)200m以下のおよびやや開析の進んだ丘陵地といくつかの段丘面の発達した台地、(3)利別川およびその支流の諸河川沿いに広がる低地に大きく3つに区分されている（岡・三谷、1981）。

(2)の丘陵地および台地の中でも、利別川をはさんで広がる台地には4段の段丘面が認められ、岡・三谷（1981）により、第1段丘( $T_1$ )、第2段丘( $T_2$ )、第3段丘( $T_3$ )、第4段丘( $T_4$ )と呼ばれている。

今金町内の遺跡は、そのほとんどが $T_2$ ～ $T_4$ の段丘面上に分布し、これらの段丘面は利別川およびその支流沿いに発達した河岸段丘である。町内全域の中でもとくに神丘・鈴岡地区には遺跡の集中がみられ、18カ所の遺跡がマップ岳山麓に発達する古扇状地の縁辺に沿って分布している。この古扇状地は、現在では段丘地形をなし、 $T_3$ 面に對比される。

今金町内には、本調査前に16カ所の遺跡の所在が明らかにされていた。これらは北海道教育委員会（以下道教委といふ）が昭和48年に実施した一般分布調査によって登録されたもの12カ所、昭和54年美利河ダムの建設予定区域内およびそれに関連して、遺跡の所在が確認されたものが3カ所、昭和58年に美利河1遺跡発掘調査中発見されたもの1カ所である。

今回の調査により、新たに38カ所の遺跡が確認され、町内の遺跡は計54カ所となった。しかし、調査は、畑・牧草地など遺物の発見が容易な地点を対象としており、山林・原野・荒地など遺物の表面採集がほとんど不可能な場所が、町内全域では、まだかなりの面積にわたっている。54カ所という数字はあくまで調査時点における現状認識の結果であり、今後もさらにはあらゆる機会を通して、包蔵地の確認のための努力を怠ってはならない。また、そのより正確な範囲も把握しなければならない。

現時点で明らかになった54カ所の遺跡を時代的にみてみると、旧石器時代の遺跡が9カ所、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が3カ所、縄文時代各時期の遺跡が34カ所、縄文～統縄文時代の遺跡が1カ所、江戸時代以降の鉱物探査跡が3カ所、時期不明のもの4カ所となり、旧石器～縄文時代の遺跡が全体の約9割を占めている。

なお、據文時代～アイヌ文化期の遺跡は確認していない。

以下、各地区毎に、個別に概述するが、登載済みの遺跡の中には、位置が確定できなかったもの、遺物の散布を確認できなかったものがある。これらに関しては、道教委の包蔵地調査カードの記録を参考にしつつ述べている。

今回の調査で新たに発見された遺跡については、遺跡が所在する字名と算用数字から呼称することにした。登載済みの遺跡に関しても、字名が間違っていたり、不適切な名称と思われるものについては今回訂正した。

図1および各地形図に付した数字は道教委登載番号の末尾番号に一致する。

表1 今金町埋蔵文化財包藏地一覧(1)

登載番号	種別	名 称	所 在 地	土地所有者	住 所	地 目	備 考
1 C	鉢岡 1 号 洞窟 遺跡	字鉢岡246-1	鈴 小笠原 不動	函館市梁川町102-5	山 林	名称変更	
2 A	神丘 1 遺跡	字神丘943	川崎 純一	字神丘941	烟		
3 A	神丘 2 遺跡	字神丘314-1,3 " 308-1,9,10,314-2 " 314-4,6	平野 俊春 田中 茂光 今 金 町	字神丘312 " 701	雜 種 地 山 林 道 路	昭和63年発掘 調査実施 (町教委調査中)	
4 A	神丘 3 遺跡	字神丘359-5,360,361	天沼 尾夫	字神丘60	宅地・烟		
5 A	八東 1 遺跡	字八東17-31,32,38,39	今 金 土 地 改 良 区	字今68	烟	名称変更	
6 A	田代 1 遺跡	字田代370-1	戸 岩 忠義	字田代25	烟		
7 A	花石 1 遺跡	字花石	花石部落会			確認できず	
8 A	花石 2 遺跡	字花石47,48-1,49,50,51	古賀 規彦	川上郡茶町字標茶番外地	雜 種 地		
9 C	鉢岡 2 号 洞窟 遺跡	字鉢岡245-2	鈴 小笠原 不動	函館市梁川町102-5	山 林	名称変更 確認できず	
10 D	中里 1 遺跡	字中里139-9	鈴木 一夫	字中里189-3	烟		
11 A	種川 1 遺跡	字種川115-1,4,5	高松 良作	字種川115	烟		
12 B	カニカン岳 金 山 路	雪林署局内今金事業所177 林班			山 林	今回未調査	
13 A	美利河 1 1 遺跡	字美利河237-6,238-1,2,257-1, 4,5,6,7,258-2,3,5 " 246-1 " 260	広田 儀一 宮越 哲夫 高松 トヨ	字美利河255 " 249 札幌市白石区厚別中央4-3-4-1	烟 山 林 "	昭和58・59年 発掘調査実施 (長沼他 1985)	
14 B	美利河 1 砂金採掘跡	字美利河54-3,56,57,704-2 " 58-3 " 65-1,5,66-1 " 119-1	建設省 八重樫 うめ 広田 儀一 野村勝太郎	字美利河201 " 255 " 145	烟・原野 原 野 烟・原野 原 野	昭和63年調査 (道埋文センター) (報告書待行予定)	
15 B	美利河 2 砂金採掘跡	字美利河33-1,4,5,48-1,5 " 41-1,2 " 39-5,41-6 " 39-26 " 41-21 " 37-1	建設省 大平 岩吉 伊藤市太郎 原田 一郎 伊藤 順 伊藤 啓子	字今金596-14 字美利河227-8 名古屋市天白八事天道209 新潟県泉市大字大谷59-3 石狩郡石狩町花川北6条2	山林・原野 原 野 " " " " "	昭和56年調査 (矢吹 1982) 名称変更	
16 A	美利河 2 遺跡	字美利河283-1,4	丸山 良祐	字美利河340-8	烟・原野	昭和58年道教委 範囲確認調査	
17 A	神丘 4 遺跡	字神丘472-3,5 " 472-2,476-1,2,3	枝川 道雄 川崎 義哉	字神丘516 " 157	烟 田		
18 A	神丘 5 遺跡	字神丘617-1 " 625-1	伊藤 実 山田 昭二	字神丘484 " 625	烟 "		
19 A	神丘 6 遺跡	字神丘613	伊藤 克司	字神丘611	烟		
20 A	神丘 7 遺跡	字神丘515-2	水井 ヒテ	字神丘516	烟		
21 A	神丘 8 遺跡	字神丘262-2 " 263 " 295-1	水井 直重 平野 俊春 天沼 修嗣	字神丘516 " 312 " 298	烟 " " "		
22 A	神丘 9 遺跡	字神丘269-1,270-1,271,278,279-1	平野 俊春	字神丘312	烟		
23 A	神丘10 遺跡	字神丘391-4 " 395-2 " 397-1,2,3	山崎 治郎 須田 一由 阿部 優	字神丘402 " 450 北檜山町字東丹羽20	烟 " " "		
24 A	神丘11 遺跡	字神丘26-1	木島 雄五	字神丘364	烟		

※ 種別の表記は以下の略号を用いた。A : 遺物包含地 B : 鉱物採掘跡 C : 洞穴 D : 墳墓

表2 今金町埋蔵文化財包藏地一覧(2)

登載番号	種別	名 称	所 在 地	土地所有者	住 所	地 目	備 考
25	A	神丘12遺跡	字神丘407-1	齊藤 謙二	字稻穂20	畠	
26	A	神丘13遺跡	字神丘430-1 〃 434-1	山本 起男 河田 正芳	字神丘421 〃 737	田 〃	
27	A	神丘14遺跡	字神丘437-3	横山 吉夫	北檜山町字丹羽331	畠	
28	A	神丘15遺跡	字神丘961・962 〃 964-1 〃 965-1,1253-1	湯元 清 笠原 保男 上村 源一	字神丘956 〃 963 〃 969	畠 〃 〃	
29	A	神丘16遺跡	字神丘1003	桜井 利一	字神丘1010	畠	
30	A	神丘17遺跡	字神丘743-1,5	多田 守伸	字神丘744	畠・田	
31	A	神丘18遺跡	字神丘1013-5	高橋 光子	字神丘986-2	畠	
32	A	神丘19遺跡	字神丘868-1	中野 貞雄	字神丘612	畠	
33	A	神丘20遺跡	字神丘1103-1,2	鈴木 真	字鈴岡124	畠・山林	
34	A	鈴岡1遺跡	字鈴岡72-2	仲川 幸一	字鈴岡71	畠	
35	A	田代2遺跡	字田代375,376,377 〃 368,368-1,374	大崎 順治 和田 昌	字今金228 字八東78	畠	筆界未定
36	A	田代3遺跡	字田代349-1 〃 350-9 〃 350-2	農林省 高田 富夫 宮崎 英作	字田代217 〃 223	畠 〃 〃	
37	A	田代4遺跡	字田代462	中野 俊昭	字田代457	畠	
38	A	八東2遺跡	字八東17-52	北館直一郎	字八東7	田・畠	
39	A	八東3遺跡	字八東18-32 〃 17-42, 18-5	西 隆二 西屋 實	字八東17 字田代54	畠 〃	
40	A	八東4遺跡	字八東18-19 〃 18-20	中坂誠一郎 千葉英五郎	字八東1 〃 4	畠 〃	
41	A	種川2遺跡	字種川137-5	長崎 貞	字種川59	宅地	
42	A	種川3遺跡	字種川196-2,3	小岩 瑞次	字種川169-8	畠	
43	A	種川4遺跡	字種川407-1	近藤 誠喜	字種川293	畠	
44	A	種川5遺跡	字種川407-1	近藤 誠喜	字種川293	畠	
45	A	種川6遺跡	字種川342 〃 343	近藤 誠喜 飯井 清隆	字種川293 〃 316	畠 〃	
46	A	種川7遺跡	字種川349,350-2	村上 仁司	字種川363	畠	
47	A	種川8遺跡	字種川521-3,523-3	伊藤 昭一	字種川532	畠	
48	A	種川9遺跡	字種川520-1	伊藤 昭一	字種川532	畠	
49	A	住吉1遺跡	字住吉97-1	広沢 次男	字住吉40	畠	
50	A	住吉2遺跡	字住吉112-9	松田大五郎	字住吉28	畠	
51	A	住吉3遺跡	字住吉252-1,2	小泉 孝則	字住吉112-8	畠	
52	A	中里2遺跡	字中里163-1	島津富美男	字花石145	畠	
53	A	花石3遺跡	字花石492-2,3	石沢 隆一	字花石266	畠	
54	A	白石1遺跡	字白石55-2	羽土 康秀	字今金287-1	畠	

## 2 神丘・鈴岡地区の遺跡

この2つの地区は利別目名川とトマンケシ川にはさまれた段丘面にあり、この段丘は鈴岡北部を肩頂として、利別川に向って広がる古扇状地形をなしている。遺跡は主にこの段丘の縁辺に沿って分布している。神丘地区に20カ所、鈴岡地区に3カ所の遺跡を確認している。

### 神丘1遺跡 (C-10-2)

神丘小学校より北方へ400mの畑が遺跡とされる。標高は約50mである。今回の調査では遺物の採集はできなかった。

### 神丘2遺跡 (C-10-3)

扇状地性段丘の中で、もっとも高い平坦面は利別川に向かって南北にのびており、遺跡はこの平坦面に沿った一段下の面上（比高差約10m）に立地する。標高37～38m。利別川との比高は約30m。

この遺跡は道営畠地帯総合土地改良事業のうちの農道工事に伴って、昭和63年8月に今金町教育委員会によって発掘調査が実施されている。峠下型細石刃核を中心とした、メノウを主な石材とする旧石器時代の石器群が検出されている。

### 神丘3遺跡 (C-10-4)

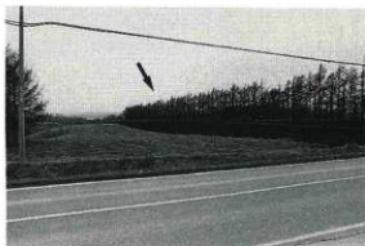
旧国鉄瀬棚線神丘駅より北へ250mの神丘2遺跡より低い台地上に位置する。文様不明の縄文土器小片、安山岩製のスクレイパー、フレーク、頁岩のフレークなどを採集している。

### 神丘4遺跡 (C-10-17)

この遺跡は、扇状地形のもっとも高い平坦面上にあり、深い谷に面して、比較的広範囲に遺物が散布していた。標高45～50mである。縄文時代早期（東釧路IV式）および後期前葉（大津式）の土器片、



神丘2遺跡



神丘5遺跡



神丘6遺跡



神丘8遺跡



図2 神丘・鈴岡地区的遺跡分布（国土地理院発行2万5千分の1地形図「丹羽」、「今金」、「北一郷」、「北二郷」、「北三郷」、「北四郷」、「北五郷」、「西郷」、「神丘」、「生穂」、「東丹羽」、「利根川」を使用。以下地形図名のみを示す。）

石匙などが採集された(図版7-1)。なお、この遺跡からは土地所有者の一人である川崎勝代氏によって遺物が採集されている。遺跡は水田造成により一部破壊されている。

#### 神丘5遺跡(C-10-18)

神丘4遺跡に続く平坦面で、国道230号線に近接している。文様不明の縄文土器小片、安山岩・黒曜石・頁岩・メノウ製のフレークを採集している。

#### 神丘6遺跡(C-10-19)

神丘5遺跡と谷をはさんで位置する。絶条体圧痕文の付された土器片、黒曜石の石槍、石斧片、フレークなどを確認している(図版7-2)。

#### 神丘7遺跡(C-10-20)

この遺跡は、扇状地性段丘の南東縁、舌状にのびる台地の先端部に位置する。標高は約50m、トマンケシ川との比高は約35mである。頁岩製の細石刃、彫器、フレークなどが採集され(図版7-3)、土器片は散布していなかった。旧石器時代の遺跡と推定される。

#### 神丘8遺跡(C-10-21)

扇状地形段丘のもっと高い平坦面の南端に位置する。標高40~45mである。採集遺物は、細石刃、石刃、彫器など旧石器時代の石器と縄文時代早期に特徴的な石鏃を確認している(図版7-4)。

また、千代峯氏(市立函館博物館)より、この遺跡の付近において昭和20年夏、土器片を採集したことがあるという教示を得た。

#### 神丘9遺跡(C-10-22)

馬の背状にのびる平坦面に続く緩斜面上に立地する。標高40~45mである。採集遺物は旧石器時代の所産である彫器、搔器、黒曜石、メノウ製のフレークのはか石匙(図版7-5)があり、土器は確認されていないものの縄文時代にも生活が営まれた可能性がある。

#### 神丘10遺跡(C-10-23)

旧瀬棚線神丘駅より西へ500mのところにインマヌエル教会がある。この教会の西側の畑において、東西250mにわたり遺物の散布がみられた。縄文時代中期(円筒土器上層式)の土器片(図版7-6)、安山岩製のスクリイバー、フレーク、頁岩およびメノウ製のフレークを確認している。

#### 神丘11遺跡(C-10-24)

インマヌエル教会の南側、旧瀬棚線と利別川にはさまれた畑が遺跡である。標高12~13m。縄文時代前期(円筒下層式)の土器片、黒曜石の石鏃、安山岩の石槍、スクリイバー、石斧、半円状扁平打製石器など多数が採集された。また、神丘在住の須田猛氏によって縄文時代後期前葉の所産である鐸形土製品が採集されている。鋸部を欠損するが、ほぼ完形のものである(図版7-7)。



神丘9遺跡



神丘10遺跡

#### 神丘12遺跡 (C-10-25)

神丘10遺跡より一段高い平坦面上、標高20mに立地する。文様不明の縄文土器小片、安山岩・頁岩・黒曜石・メノウのフレークが採集された。

#### 神丘13遺跡 (C-10-26)

扇状地性段丘の西北端に位置する。標高20m、利別目名川に面し、それとの比高差は約10mである。文様不明の土器小片、黒曜石の石鉋、安山岩のスクレイパー、フレーク、頁岩製のフレークを採集しており、中でも安山岩製のフレークが多い。遺跡の現況は水田となっており、包含層は造成によってすでに消失していると思われる。

#### 神丘14遺跡 (C-10-27)

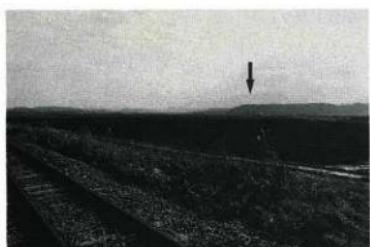
神丘13遺跡に続く平坦面で、舌状を呈する台地上に位置する。時期不明の縄文土器底部2片と安山岩・頁岩・黒曜岩・メノウのフレークを採集している。

#### 神丘15遺跡 (C-10-28)

神丘小学校より北西へ約500mの畠が遺跡である。神丘1遺跡に近接し、標高約40mである。遺物の散布は、段丘の縁辺に沿って、それぞれ100~200mの間隔をもって4カ所にまとまって認められた。これらを一連のものと判断し、段丘縁辺部約500mの細長い範囲を遺跡とした。遺物は、縄文時代後期(余市式)の土器片、安山岩・頁岩・黒曜石のフレークを採集している。また、この遺跡からは、土地所有者の1人である上村源一氏によって、土器片、石鉋、石匙、石槍、石斧などが採集されている。

#### 神丘16遺跡 (C-10-29)

この遺跡は神丘1~15遺跡などが立地する扇状地性段丘より1段下の段丘面に位置する。この段丘面は利別目名川によってつくられたものであり、町内の段丘面区分によるとT<sub>4</sub>面に対比される。標高



神丘11遺跡



神丘13遺跡



神丘15遺跡



神丘16遺跡

約25m であり、利別目名川との比高は約10m である。遺物は縄文時代後期初頭（余市式）の土器片、安山岩のスクレイパー、フレーク、黒曜石・頁岩・メノウのフレークなどを確認している。

#### 神丘17遺跡（C-10-30）

神丘16遺跡と同じ段丘面に位置し、標高約23m である。遺物は縄文時代前期初頭の網文式、および単節ループ文の施された土器片（春日町式？）と黒曜石・安山岩・頁岩のフレークなどを採集している。なお、この遺跡より南西へ約300m の地点において、全長34cm の緑色泥岩製の磨製石斧と、緑色凝灰岩製の石棒が神丘在住の上村源一氏によって採集されている。この地点は現在は河川改修によって破壊された。

#### 神丘18遺跡（C-10-31）

神丘16・17遺跡と同じ段丘面に位置し、標高約30m。多量の土器片を採集しており、縄文時代中期後半（榎林式）の土器片の他に、口縁部に縄線文の付された土器片、細い貼付帶のある土器片（大津式？）などがある。石器は頁岩の石鎌、安山岩・頁岩・黒曜石のフレークを確認している。

なお、天野哲也氏（北海道大学北方文化研究室）の教示によると、この遺跡より北東へ約400m の地点にて、昭和46年8月、縄文土器3片（後期・余市式）を採集されたという。今回は確認できなかつたが、今後、所在の確認を行ないたい。

#### 神丘19遺跡（C-10-32）

遺跡は、神丘1～15遺跡が立地する扇状地性段丘上の南東端に位置し、標高約60～65m である。遺物は旧石器時代の頁岩の石核、両面加工の石器（図版7-8）、フレークなどを確認している。

#### 神丘20遺跡（C-10-33）

遺跡はトマンケシ川に面した標高約80m の平坦面に位置する。頁岩製の尖頭器（図版7-9）、フレークを採集しており、神丘19遺跡同様、旧石器時代の遺跡である。

#### 鈴岡1号洞窟遺跡（C-10-1）

遺跡は鈴岡北部の標高約130m の山林にあり、巨礫が積み重って空洞部をなしている。内部の広さは幅5.30m、奥行3.90m、高さ1.50m である。遺物は土器片1片を発見したにとどまった。この洞窟の発見の経緯は明らかではないが、瀬棚町大光寺の住職故房崎泰憲氏が昭和33年ごろ遺物を採集しており、この中には、縄文時代後期榎林式、晚期大洞C<sub>2</sub>式相当のもの、統縄文時代恵山式の土器がある。

#### 鈴岡2号洞窟遺跡（C-10-9）

今回の調査では、遺跡の所在を確認することはできなかった。

#### 鈴岡1号洞窟遺跡（C-10-34）

遺跡は標高約85m の扇状地性段丘上に位置する。黒曜石の細石刃・頁岩製の石刃（図版7-10）などを採集している。



神丘18遺跡



鈴岡1号洞窟遺跡

### 3 田代・八東・白石地区の遺跡

田代・八東地区は利別川とオチャラッペ川との合流点の南東部の地区である。東西にのびる丘陵をとりまくように T<sub>4</sub>面が広がっており、8カ所の遺跡がこの平坦な段丘縁辺部に分布している。

白石地区は田代・八東地区的南東部にある。オチャラッペ川左岸に段丘面がみられるが、遺跡の所在は認められず、右岸の丘陵部において1カ所の遺跡を確認したにとどまった。

#### 田代 1 遺跡 (C-10-6)

利別川に面した段丘の縁辺に位置し、標高約20mで、利別川との比高は約10mである。遺跡は白石地区に通する道路の両側畠地とされており、土器片、石器数点が採集されているようである。今回の調査においては黒曜石の石錐の基部と頁岩のフレークを採集している。この遺跡は当初、田代 2 遺跡とされていたが、登載済みの田代遺跡が八東地区に含まれることから、本遺跡を田代 1 遺跡と名称変更する。

#### 田代 2 遺跡 (C-10-35)

田代 1 遺跡に続く段丘上に位置し、深い谷に面している。この遺跡からは、土地所有者である大崎光雄氏によって、黒曜石の石錐、安山岩の石槍、石斧などが採集されている。今回の調査では頁岩製のフレークを採集したにとどまった。

#### 田代 3 遺跡 (C-10-36)

田代 1 遺跡の東方約400mの段丘縁辺に位置し、標高約20m。遺跡は段丘の縁辺に沿って約300mにわたり散布しており、この大部分が營林署の畑となっている。以前から遺物の採集がなされており、その一部は今金小学校に保管されている。今回の調査においても多量の遺物が採集され、縄文時代後期前葉（大津式）の土器片、石錐、安山岩の石槍、石のみ、頁岩・安山岩・黒曜石のフレークを採集している。（図版 8-上段）。

#### 田代 4 遺跡 (C-10-37)

東西にのびる丘陵の南側の段丘面にあり、標高40mである。遺物は、文様不明の縄文土器片、石斧片、安山岩・頁岩製のフレークを確認している。

#### 八東 1 遺跡 (C-10-5)

道道今金北檜山線と道道今金八雲線の分岐点に位置するとされている。田代、八東地区的遺跡が立地する T<sub>4</sub>面の西端であり土器片、石器片が数点採集されたとあるが、今回の調査においては、遺物の確認はしていない。この遺跡は当初、田代遺跡とされていたが、今回の調査により八東地区に含まれることが判明し、八東 1 遺跡と名称変更した。



田代 3 遺跡



八東 1 遺跡

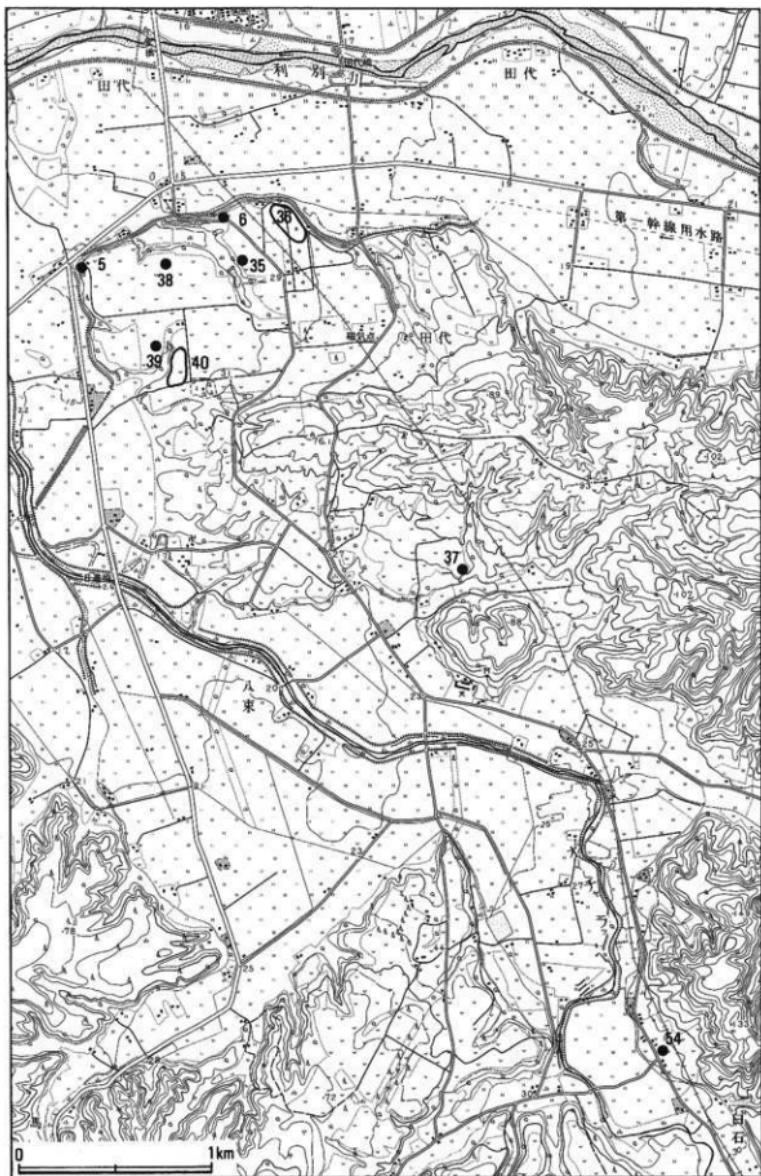
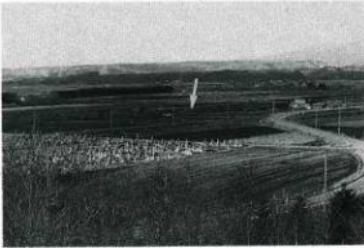


図3 田代・八東・白石地区の遺跡分布（2万5千分の1地形図「八東」）



八東 2 遺跡



八東 4 遺跡

田代1および2遺跡と深い谷をはさんで位置する。標高約25mである。遺物は、口縁部に縄線文のある土器片、隆帯に円形の刺突が加えられた土器片、安山岩製の石槍、スクレイバー、半円状扁平打製石器、擦石、安山岩・頁岩のフレークなどを採集している（図版8－中段）。

#### 八東3遺跡（C-10-39）

八東2遺跡より南へ400mに位置する。標高約25m。遺物は南北に走る沢にそって南北150mの範囲に散布しており、羽状縄文の付せられた土器片、頁岩製の石匙、安山岩のフレークを採集している。

#### 八東4遺跡（C-10-40）

八東3遺跡とは沢をはさんで対面する。土地所有者の話によると、以前沢を埋めた際、土器や石器が出土したことがあり、八東3遺跡と相まって沢をとりこむように遺跡が存在したと思われる。遺物の散布は南北に約200mの範囲にみられ、櫛状工具で文様を描き太い沈線で縁取りしている縄文時代後期前葉（大津式）の土器片、石鎌、石槍、範状石器、石斧、その他多量の安山岩・頁岩・黒曜石のフレークを採集している（図版8－下段）。

#### 白石1遺跡（C-10-54）

遺跡はオチャラッペ右岸、田代・八東方面へのびる丘陵の縁辺部の緩かな斜面に位置している。標高約30m。白石寿の家の北東側において文様不明の縄文土器小片を採集した。

### 4 種川地区の遺跡

この地区は、左股川下流部を扇頂として南に広がる古扇状地形をなす段丘と、メップ川と下ハカイマップ川にはさまれた丘陵、および下ハカイマップ川とブイタウシナイ川にはさまれた丘陵地帯の3つに大きく分かれ、それぞれにはT<sub>1</sub>～T<sub>4</sub>のいずれかの段丘面がみとめられる。これらの段丘面上に9ヵ所の遺跡が分布している。

#### 種川1遺跡（C-10-11）

メップ川右岸には、T<sub>1</sub>～T<sub>4</sub>面がメップ川に向って広がっており、遺跡は下から2段目の段丘面（T<sub>2</sub>面）に位置し、標高50～60mである。今回の調査では、遺物を確認できなかったが、土地所有者の高松良作氏により、石鎌、石匙、磨製石斧など縄文時代の遺物が採集されている。

#### 種川2遺跡（C-10-41）

国道230号線からメップ川に沿って一般道道光台種川線を北へ700mの地点にあり、T<sub>4</sub>面の突端に位置する。標高25m。土地所有者の長崎貞氏によれば、昭和50年頃家を建てるとき土を削ったところ、完形の土器（図版9－1）などが出土したという。この完形の土器は高さ9cmで、無文地に浅い沈線で

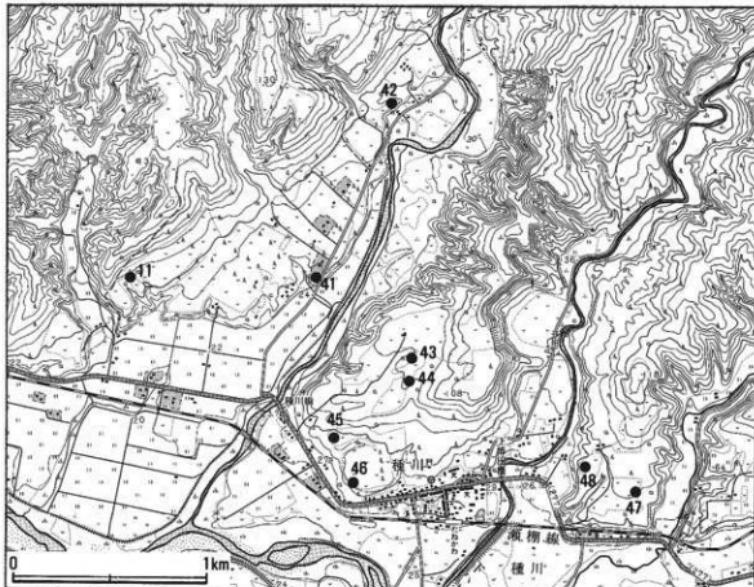


図4 種川地区の遺跡分布（2万5千分の1地形図「今金」・「八東」）

施文しており、縄文時代後期のものと思われる。今回の調査では、その地点と道路を隔てた東側の狭い畑にて、文様不明の縄文土器片、頁岩・安山岩・黒曜石のフレークなどを採集している。

#### 種川3遺跡 (C-10-42)

種川2遺跡よりさらに1km北方の畑内にある、種川2遺跡と同じ段丘面上にあり、標高40mである。マップ川上流に向って舌状に張り出す地形となっている。採集した遺物は、文様不明の縄文土器小片、黒曜石の石鎚、搔器、刃部が丸のみ状をなす石のみ(図版9-2)，安山岩のスクレイパー、その他フレークである。

#### 種川4遺跡 (C-10-43)

マップ川と下ハカイマップ川の間にはさまれた丘陵の南端にはT<sub>1</sub>～T<sub>4</sub>の段丘面がみられ、この遺跡はT<sub>2</sub>面に対比される段上面に位置する。標高は約75～80m。文様不明の縄文土器片、安山岩の石槍(図版9-3)，安山岩・頁岩のフレークが採集された。

#### 種川5遺跡 (C-10-44)

種川4遺跡と同じ段丘面上に位置し、両者ともせまい範囲にまとまって遺物が散布していたため、別な遺跡として取り扱った。縄文時代後期(余市式)の土器片(図版9-4)と頁岩・メノウのフレークを採集している。

#### 種川6遺跡 (C-10-45)

種川4・5遺跡のある段丘面より一段下のT<sub>3</sub>面に対比される舌状に張りだした平坦面に位置する。



種川 2 遺跡



種川 6 遺跡



種川 7 遺跡



種川 8 遺跡

標高約45m。この遺跡には多量のフレーク、チップが散布しており、石材は頁岩が圧倒的に多く、黒曜石・メノウも含まれる。製品には石匙、石錐、両面加工の石器、石斧がある（図版9-5）。石器類が多いのに比べ、土器は文様不明の小片が3点のみ採集されたにとどまった。なお、石器類には、旧石器的様相をもつものは認められなかった。

#### 種川 7 遺跡 (C-10-46)

種川 6 遺跡と同じ段丘面に位置し、舌状に張り出した平坦面の縁辺に位置する。標高約45m。遺物は文様不明の縄文土器小片、頁岩製の石核、安山岩製の両面加工の石器、その他、頁岩・安山岩・黒曜石のフレークを採集している。

なお、この遺跡からは土地所有者である村上仁司氏によって、長さ11.5cmの磨製石斧が採集されている。

#### 種川 8 遺跡 (C-10-47)

下ハカイマップ川とブイタウシナイ川によってはさまれた丘陵には、それをとりまくようにT字面に対比される平坦面が広がっており、遺跡は平坦面の東縁に位置する。標高は55~60mである。採集された遺物は、縄文の付された時期不明の土器小片、土器の底部片、黒曜石製の石錐、頁岩・メノウ製のフレークなどである。

#### 種川 9 遺跡 (C-10-48)

種川 8 遺跡と同じ平坦面であるが深い谷によって隔てられている。標高は50~55mである。今回の調査では遺物を確認することはできなかったが、土地所有者である伊藤昭一氏によって、磨製石斧2点が採集されている。

## 5 住吉地区の遺跡

住吉地区は利別川が大きく蛇行しており、そのためか河岸段丘はあまり発達していない。3カ所の遺跡の所在を新たに確認した。

### 住吉1遺跡 (C-10-49)

旧瀬棚線北住吉駅から西へ500mの旧瀬棚線と国道にはさまれた狭い畑が遺跡である。標高約30m。文様不明の縄文土器片、頁岩・メノウ・黒曜石製のフレークなどを確認している。

### 住吉2遺跡 (C-10-50)

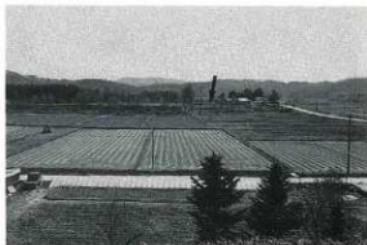
旧瀬棚線北住吉駅から南へ約350mの上ハカイマップ川に面した右岸の畑にある。文様不明の縄文土器片、メノウ製のフレークなどを採集した。

### 住吉3遺跡 (C-10-51)

住吉2遺跡と川を隔てて面している。文様不明の土器片、メノウ・頁岩製のフレークを採集した。



住吉1遺跡



住吉2遺跡

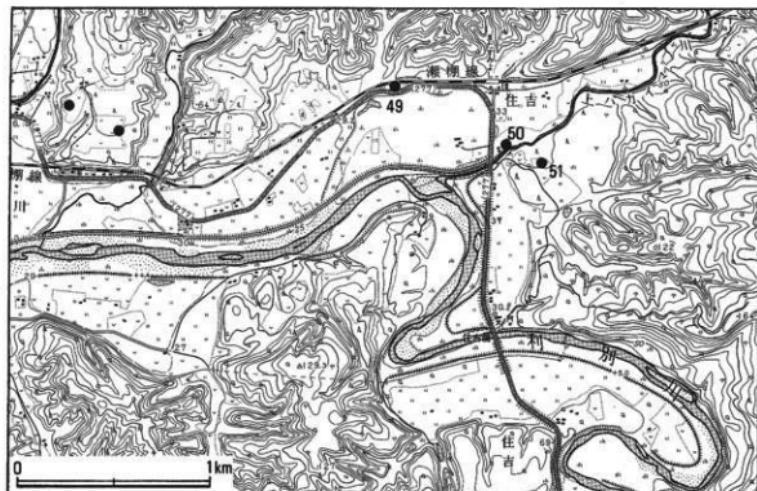


図5 住吉地区の遺跡分布 (2万5千分の1地形図「今金」・「八束」)

## 6 中里・花石地区の遺跡

これらの地区では利別川は南西方向へ向かって流れしており、この両岸に  $T_2 \sim T_4$  の段丘面が点在している。中里地区では、2カ所の遺跡が、花石地区に3カ所の遺跡が所在する。

### 中里1遺跡 (C-10-10)

遺跡は利別川と国道にはさまれた畑内にあり、川に面した突端に位置するらしい。標高55~60m。発見者である島津富美男氏によると、発見したのは昭和40年ごろ、直径約3mほどの円形に河原石が並べられ、中央部に立石があり、日時計的形態をととのえており、同様のものが隣接して2カ所並んでいたという。何らかの墳墓と考えられるが、昭和42~43年頃草地改良により、上部遺構は消滅した。登載されている地番、地図に誤りがあったので、今回訂正する。

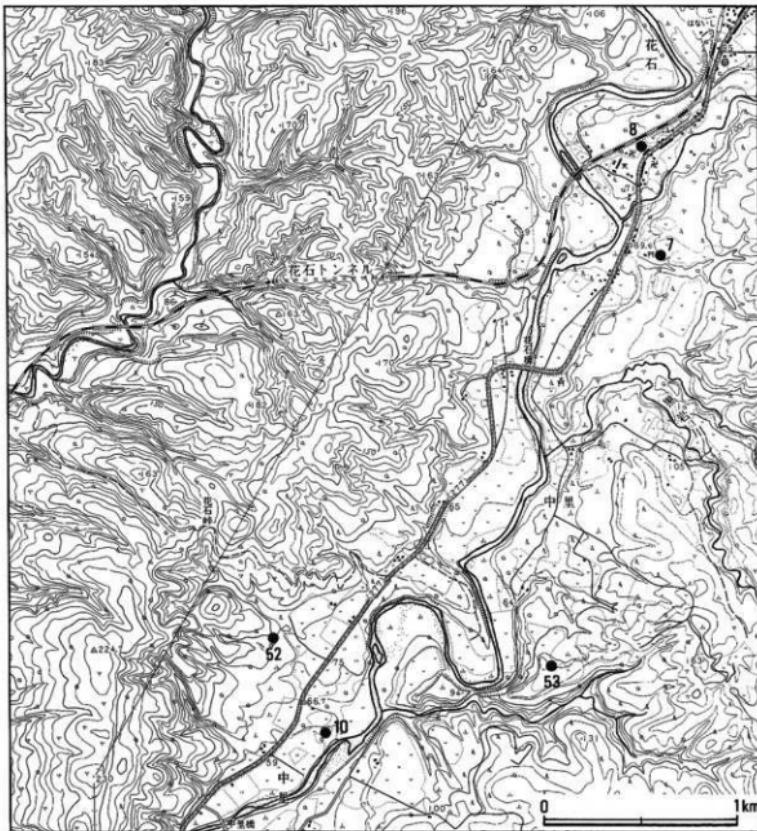


図6 中里・花石地区的遺跡分布 (2万5千分の1地形図「ルコツ岳」・「美利河」)



中里 2 遺跡



花石 3 遺跡

#### 中里 2 遺跡 (C-10-52)

利別川右岸の  $T_4$ 面に対比される段丘面に位置する。標高約90m。旧石器時代のものと思われるメノウ製の石刃（図版9-6），およびフレークを採集した。農地造成によりすでに破壊された。

#### 花石 1 遺跡 (C-10-7)

利別川と珍古辺川との合流点の東岸一帯とされる。今回の調査では明確な位置は確認できなかった。道教委の包蔵地カードによると旧石器時代の石器が採集されているらしい。

#### 花石 2 遺跡 (C-10-8)

花石小学校の東方300mの国道と旧瀬棚線の間が遺跡とされる。今回の調査では遺物を確認していないが、石器が採集されているらしい。

#### 花石 3 遺跡 (C-10-53)

利別川左岸、標高約110～115mの  $T_3$ 面に対比される段丘面上に位置する。遺物は頁岩製石刃、彫器など（図版9-7）を採集しており、旧石器時代の遺跡である。

### 7 美利河地区の遺跡

利別川本流とその東を流れるビリカベツ川、西から流れ込むチュウシベツ川の三河川が合流する美利河三股と呼ばれるあたりは、現世の河川堆積物が広がり、その周辺を  $T_4$ 面に対比される安定した段丘面がとりまいている。遺跡は4ヵ所の所存が確認されており、今回の調査では新たな遺跡の発見はできなかった。

#### 美利河 1 遺跡 (C-10-13)

この遺跡については、今回、範囲確認調査を実施したので、Ⅲ章にて詳述する。



美利河 2 遺跡



美利河 1 砂金採掘跡

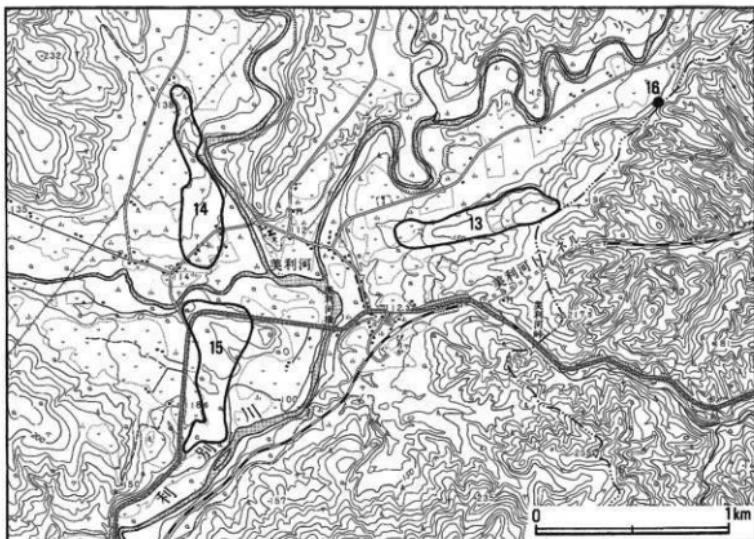


図7 美利河地区の遺跡分布（2万5千分の1地形図「美利河」）

#### 美利河2遺跡 (C-10-16)

この遺跡は、昭和58年6月、国営の草地改良工事によって表土の除去、斜面のカッティングが行われた際、美利河1遺跡の発掘調査中、調査員によって発見されたものである。遺跡は、ビリカベツ川左岸に沿って東西にのびる段丘 ( $T_4$ 面) 緩斜面上にあり、標高150~160mである。

昭和58年7月道教委によって範囲確認調査が行なわれ、蘭越型細石刃核、石刃核、石刃など約1千点の遺物が出土し、約5,800m<sup>2</sup>が遺跡とされた。現在は、土地所有者の理解を得て、現状保存されている。今回の調査においても、多量の頁岩製・黒曜石製フレーク・チップが採集された。

なお、土地所有者である丸山良祐氏によって、旧石器時代の尖頭器(図版9-8)、縄文時代早期の貝殻条痕文土器などが採集されている。道教委の範囲確認調査においても、絡条体圧痕文土器一片が含まれていることから、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡と考えられる。

#### 美利河1砂金採掘跡 (C-10-14)

利別川本流とチュウシベツ川の合流点西方一帯南北に細長く約1kmの範囲が遺跡とされる。標高は約110~135mの  $T_4$ 面に対比される段丘上に位置する。遺構としては、砂金採掘の際に残された水路、石垣および石積みがある。美利河ダム建設に伴い、昭和63年に北海道埋蔵文化財センターにより記録保存のための調査がなされた。

#### 美利河2砂金採掘跡 (C-10-15)

美利河1砂金採掘跡の南方、チュウシベツ川を隔てた南北約800mの範囲が遺跡である。標高110~125m。ダム建設に伴い、昭和56年に北海道埋蔵文化財センターにより記録保存のための調査が行なわれている(矢吹、1982)。これらの砂金採掘の時期については、不明瞭な部分が多く定かではないが、江戸時代寛永年間から開始されたものであろう(矢野、1988)。

## 8 その他の地区的遺跡

ここでは国有林内の遺跡1ヵ所を概述する。今回は日程の都合上、現地を確認していない。

### カニカン岳金山跡 (C-10-12)

カニカン岳は利別川本流の源流近くにあり、頂上は標高約981mを測る。この南東の山腹に採掘坑と材料置場があるとされる。昭和51年10月に北海道開拓記念館の矢野牧夫氏らが今金山岳会と調査を行なっている。その際、花崗岩製の石臼が発見、採集されている。カニカン岳における金の採掘の時期については、明らかでないが、明治20年代のころであろうと推定されている（矢野、1988）。



カニカン岳金山跡入口



金山跡発見の石臼（写真提供 今金山岳会）

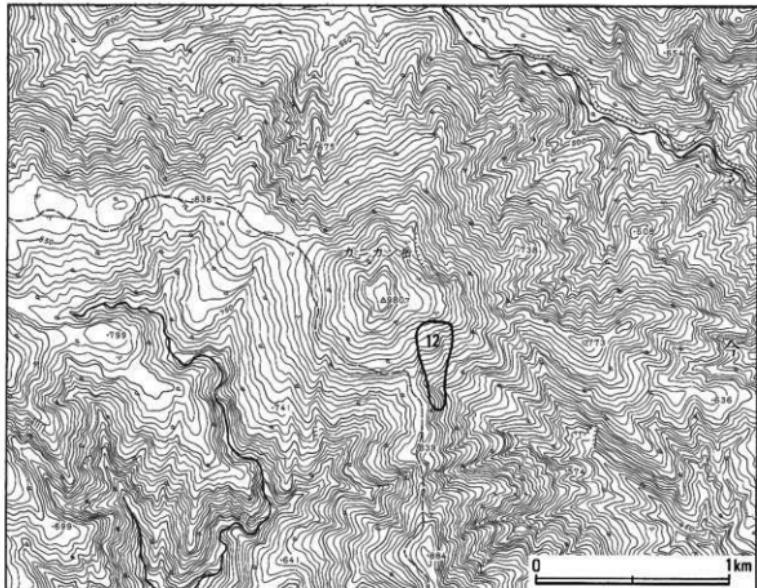


図8 その他の地区的遺跡分布 (2万5千分の1地形図「二股温泉」)

### III 美利河1遺跡範囲確認調査

#### 1 遺跡の概要

美利河1遺跡は、日本海側と内浦湾側の分水嶺にあたる美利河畔の北方約400mの日本海側にあり、標高150~160m、利別川の支流であるビリカベツ川左岸の丘陵上に位置している。川との比高は約50mである。以下、遺跡の発見から今回の範囲確認調査までの経緯について略述する。

**美利河1遺跡の発見**——昭和53年6月、北海道開発局函館開発建設部（以下函館開建という）が美利河ダム建設にあたり、築堤材料の適否に関する土質調査を美利河地区の丘陵一帯において行なったところ、10ヵ所の試掘穴（4m×4m）のうちの一つから石器類が発見され、市立函館博物館千代葉氏のもとに届けられ、千代葉氏が現地を確認した結果、旧石器時代の遺物であることが判明した。

**昭和54年範囲確認調査**——連絡を受けた道教委は、新発見の遺跡—美利河1遺跡（C-10-13）として登載し、函館開建と協議を重ね、昭和54年8月に範囲確認調査を実施した。調査は1m×1mの試掘ピットを図10・11のように95ヵ所設けて行なわれ、このうち遺物が出土したのは、3ヵ所であり、ほとんどが前述の土質調査の試掘穴の中、およびその付近であった（なお、この試掘穴は、後述の発掘調査のB地区内に含まれる、図10参照）。この際出土した遺物は、スクレイパー、舟底様石器など29点である（千葉、1980）。

**美利河1遺跡の発掘調査**——道教委ではふたたび函館開建と協議を重ねたが、ダム建設には、築堤材料の粘土の採取が必要とされ、やむなく発掘調査を行うこととなった。調査は昭和58年と59年の2年次にわたり、A・B地区1,585m<sup>2</sup>について実施され、その成果が纏められている（長沼他、1985）。

**昭和58年範囲確認調査**——昭和58年の発掘調査の進行に伴い、A・B両地区ともに調査区域外にも遺跡が括がっていることが判明した。そこで道教委は、同年7月と10月に範囲確認調査を行なった。

協議区域は図9に示した範囲であり、調査の結果、このうちの7,612m<sup>2</sup>が包蔵地として追加された（図10）。この際の遺物出土状況、遺物については発掘調査報告書に触れられている（長沼他、1985）。

この範囲確認調査によって、本遺跡の括がりはかなり広範囲に、しかも遺物が濃密に分布していることがわかり、協議区域外にも包蔵地の括がる可能性が示された。

その後、函館開建では、この地区からの粘土採取を断念し、現状のまま現在に至っている。

今金町教育委員会では、I章に述べたとおり、美利河ダム完成後の周辺整備、および農業基盤整備事業などの開発行為に備えるため、今回163,000m<sup>2</sup>を対象として試掘を伴う範囲確認調査を実施した。

#### 2 調査区の設定と調査方法

遺跡のある丘陵一帯は、函館開建により測量がなされていた。今回の調査区のUラインを中心として、50mの方眼が組まれており、前述の範囲確認調査、発掘調査ともこの50m方眼に基づいて行なわれていたので、今回の調査区の設定も同様とした。

なお、U-30、U-70の測量成果は次のとおりである。

U-30 X=-169,506.632 Y=-3,329.107

U-70 X=-169,336.175 Y=-2,967.244 ※平面直角座標系第XII系

調査区は10mグリッドとし、短軸（N-65°-Eに傾くが便宜上、南北方向とする）にアルファベット、長軸（東西方向）に数字を用いて、全体を覆った（図9）。試掘ピットは1m四方であり、基本的

には東西方向に20m おき、南北方向に10m おき、つまり $20 \times 10m$  につき 1 個の割合で設けたが、筆やぶ、山林部分については、 $40 \times 10m$  につき 1 個の割合の場合もある。また昭和63年度の調査では地形に合わせて変則的に設けている部分もある。試掘ビットの呼称は、10m グリッドの四つの交点のうち北西隅の交点を用い、できるだけこの交点の南東側を掘開した。しかし、木の根などの諸条件によりこのとおりに掘開できないビットもあり、この場合は、もっとも近い北西隅の交点によって呼称した。

### 3 昭和62年度の調査

昭和62年度は調査区の西側半分、3~66ラインまでの約 $72,000m^2$ を対象とした。303ヵ所の試掘ビットを設け、 $303m^2$ を掘開した（図10~上段）。

対象とした区域を地形的にみると、発掘調査が行なわれた A 地点と深い谷をはさんだ南側に東西へのびる標高約 $150m$ ~ $160m$ の段丘面があり、その西方には一段低い標高約 $135m$ の舌状をなす段丘面がある。そして、2つの段丘面は緩斜面によって隔てられ、全体的には馬の背状を呈している。

土層の堆積状況を図10下段に示した。I 層：耕作土および表土。II 層： $k_0 - d_2$ と考えられる淡褐色火山灰層。IIIa 層：暗褐色粘土層（漸移層）。粘性に乏しい。IIIb 層：IIIa 層よりやや明るい褐色粘土層。粘性に乏しい。IV 層：明褐色粘土層。粘性強く堅密である。VI 層：小礫混り明黄褐色粘土層。V 層：明黄色粘土層。となっており、遺物は I 層から IV 層、IV' 層にかけて出土しているが、主な包含層は IV 層である。IV' 層は緩斜面に顕著にみられ、段丘疊層の流れ込みによる二次堆積土と思われる。

出土遺物点数は表面採集の遺物も含めて、818点であり、このうち113点は取り上げていない。各試掘ビット別の遺物出土点数は表3に示すとおりである。標高 $150$ ~ $160m$ の平坦な段丘面上にもっとも濃密に分布しており、それをとりまく緩斜面にも万遍なく分布している。標高約 $135m$ 付近の平坦面には小さな谷が中央に入っているそれをとりかこむように遺物が出土している。現在の美利河集落によって分断、削平されてしまったが、この平坦面の先端部にもかなりの濃度で遺物が包蔵されていたものと考えられる。

図12-1~9、図13-1~3が、昭和62年度調査の主な石器であり、図12-3・4を除いて、すべて頁岩を用いている。図12-1~2は末端部を折断している細石刃である。3は末端部のみの黒曜石製細石刃である。4は両面加工の尖頭器状の黒曜石を素材とし、長軸方向に対して3条の打面作出のための剥離がみられる。細石刃剥離面には3条の剥離痕が残されたオショロッコ型細石刃核である。5は、両面加工の尖頭器状の素材の長軸を縦に用い、短軸方向に加撃面を設定した蘭越型といえる細石刃核である。2条の細石刃剥離痕が観察される。6・7は彫器であり、6には彫刻刃面作出のための打面調整以外に周辺の加工がみられない。右刃である。8は搔器であり、9は器体の最大幅が中央より下部にある洋梨形の両面加工の尖頭器である。

図13-1~3は石核である。1・3は円盤状を呈し、打面をほぼ全周に転位させながら剥離を行なっている。3は裏面にも剥離が及んでいる。2は、疊面を打面としてすばりの剥片を剥取している。

### 4 昭和63年度の調査

67~130ラインを調査範囲とし、対象面積は約 $91,000m^2$ である。1 m<sup>2</sup>四方のビットの他に、 $2 \times 1$ m、 $3 \times 1$ m の試掘坑をそれぞれ6ヵ所と2ヵ所を含め、277ヵ所の試掘ビットを設けた。試掘面積は $287m^2$ である。対象区域は、遺跡のある丘陵の丘頂部にあたり、何本かの沢が入り込んでいるが、標高 $180$ ~ $190m$ の平坦な面が東西にのびている。集落がある段丘面とは急な斜面によって隔てられている。現況は山林、原野であり、雜木、笹が密生しており、規則的な試掘ビットを設けるのは困難であ

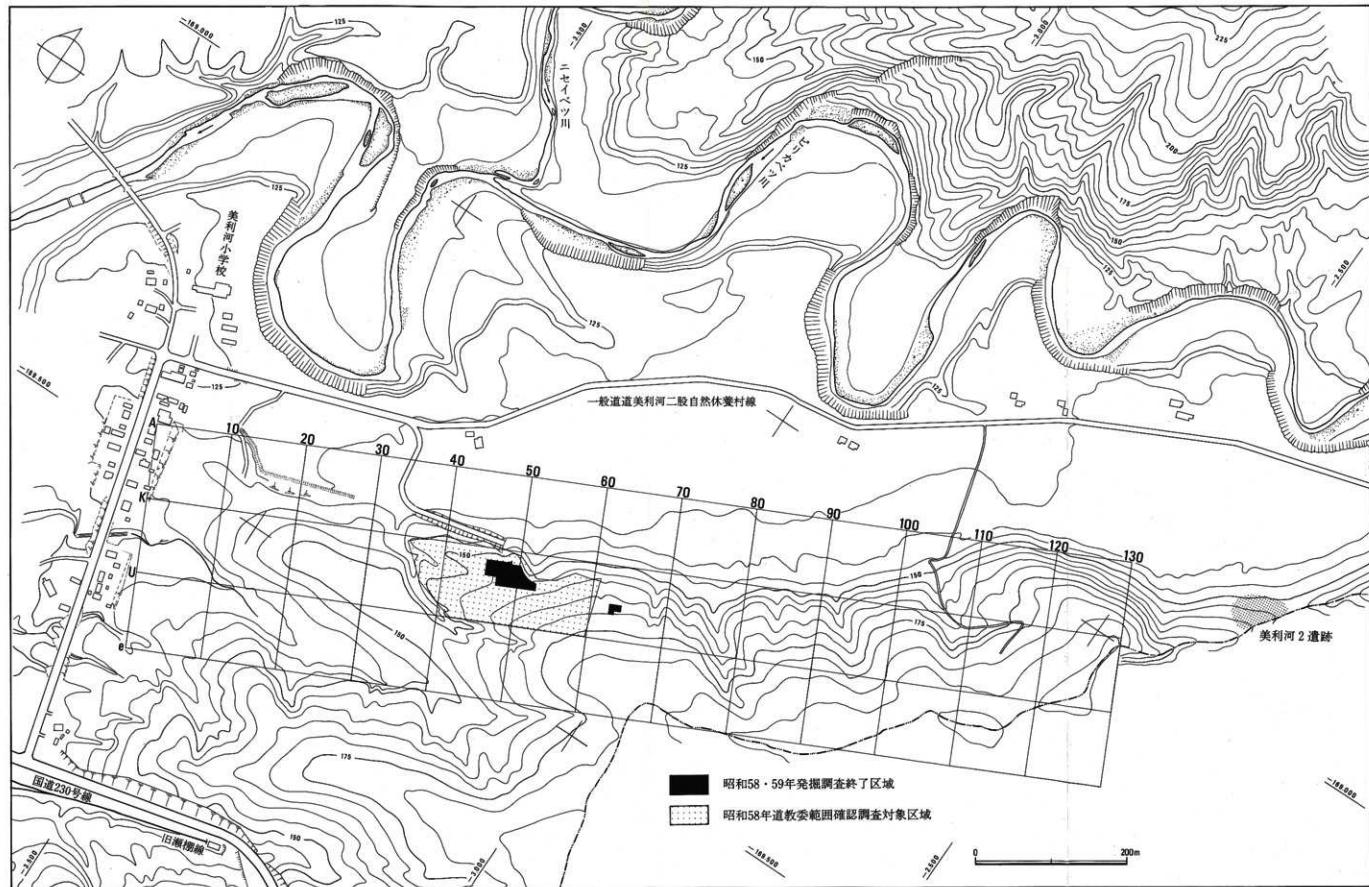


図9 美利河1遺跡の調査区と周辺の地形

表3 美利河1遺跡試掘ピット別遺物出土点数  
(仲内上段は1層、下段は1層以下出土点数を示し、Ⅲ層以下には取り上げなかった遺物も含んでいる。+は遺物なし)。

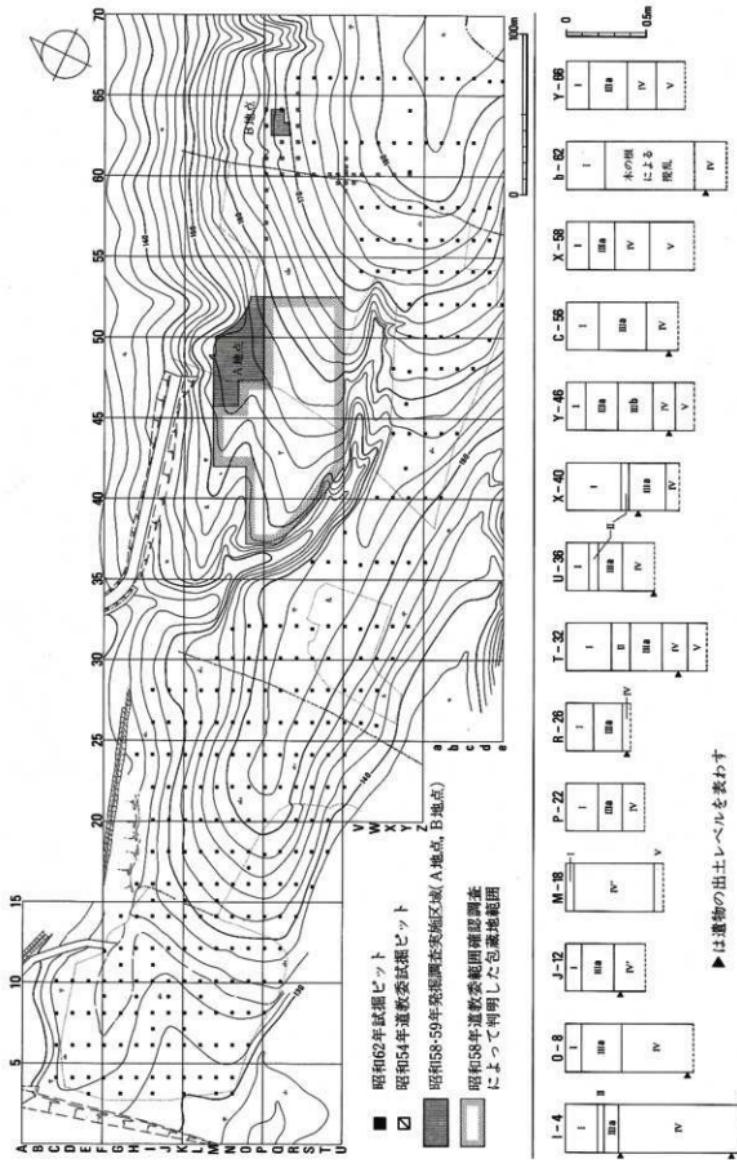


図10 昭和62年度の調査区（上）と土層柱状図（下）

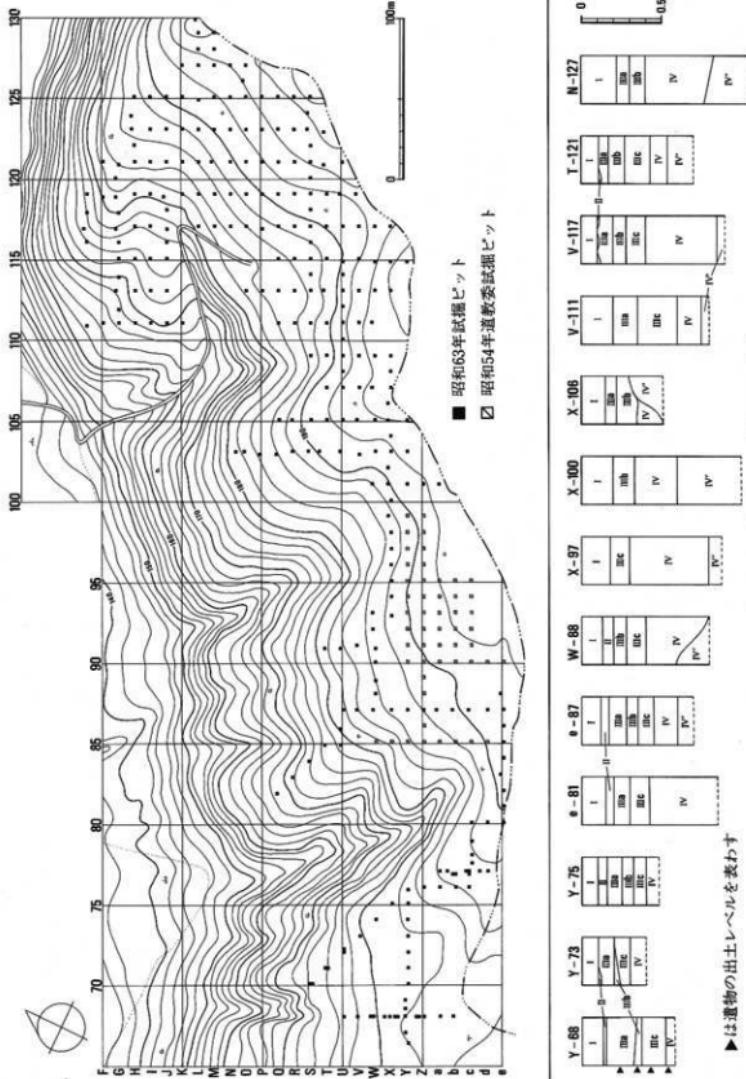


図11 昭和63年度の調査区(上)と土層柱状図(下)

▲は遺物の出土レベルを表わす

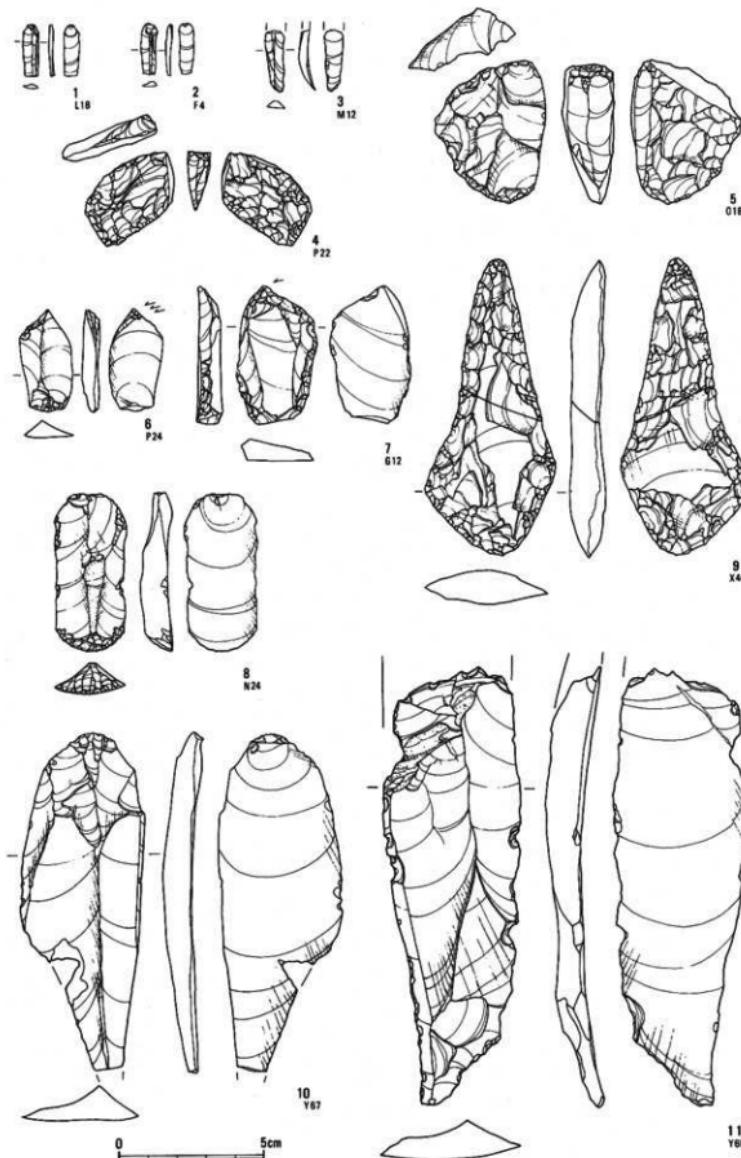


図12 美利河1遺跡の石器(1) (各番号の下は出土したビットを表す。)

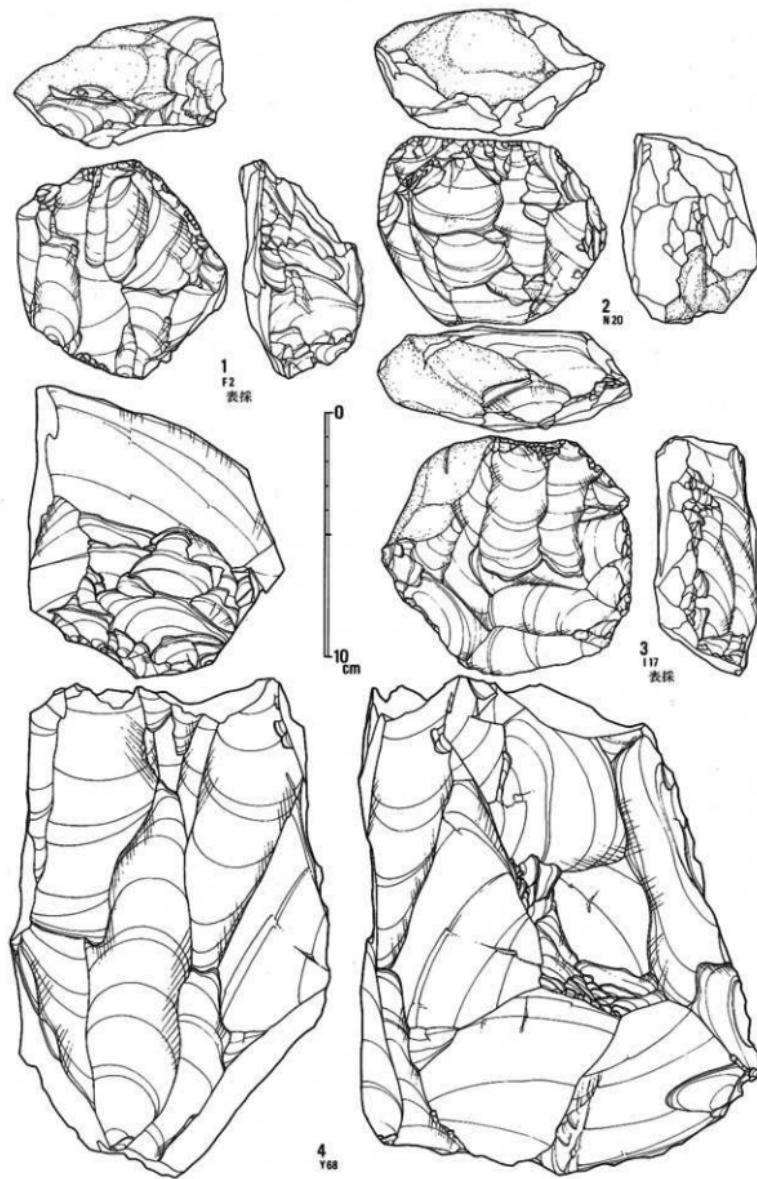


図13 美利河1遺跡の石器(2)

ったため、比較的平坦な部分について重点的に調査を行なった（図11ー上段）。

層序は、前年度に比べると、Ⅱ層の火山灰が普遍的にみられ、Ⅳ層はほぼ同じであるが、ところによつては全くロームがなく、Ⅳ'層の小砂利混りの黄褐色土がみられるピットもある。Ⅲ層が3つに分層でき、Ⅲa層、Ⅲb層の下にⅢc層：暗褐色粘土質土層があり、いずれも粘性に乏しい。遺物はⅢa層からⅣ層にかけて出土した（図11ー下段）。

遺物の出土したピットは6ヵ所のみであり、78ライン以東からの遺物の出土は全くなかった。遺物総点数は、取り上げていないもの6点を含め、31点であり、このうちY-68ピットにおいて石器の集中地点（ブロック）にあたり、図12-11の石刃、図13-5の石刃核など20点が出土した。図13-5は上下両端に打面を有しており高さ20.5cmを測る。

## 5 調査の結果

昭和62・63年度の2年次にわたる範囲確認調査をまとめてみると、調査対象面積約163,000m<sup>2</sup>、試掘ピット580ヵ所（試掘面積590m<sup>2</sup>）となり、試掘ピットのうち、遺物の出土を確認したのは、146ヵ所である。遺物総点数は表面採集資料も含め、849点であり、このうち119点は取り上げずに、出土層位を確認し、埋め戻した。遺物はすべて石器類であり、土器の出土はない。

各ピットの遺物の有無によって、美利河1遺跡の範囲を図14のように推定した。遺跡推定範囲の面積は約125,000m<sup>2</sup>であり、ほぼ75~80ラインにかけて入りこむ沢から以西を遺跡として括った。

遺跡の現況は、放牧地、採草地、山林、原野であり、30ライン以西、および発掘調査A地点付近の放牧地の緩斜面においては若干の土の移動がみられるものの、包含層はきわめて良好に保存されていることが確認された。

遺物の包含層はIV層であるが、IV層の中でもI-4ピットの柱状図にみられるようにその上部と下部とレベル差をもって出土する例もあり、発掘調査の行なわれたA地点において確認されたように、複数の文化層が重複して検出される可能性もある。また土器の出土はないとしたが、D-10ピットから縄文時代の石斧の未製品と思われるものがⅢa層より出土した（図版11ー左下）。縄文時代の文化層の存在も全く否定することはできない。

美利河2遺跡との関連については、今回の調査の結果では、遺物の分布からすると連続性はないものと判断されるが、両者とも蘭越型細石核、尖頭器などの共通する石器群を有することなどから、緊密な往来があったであろう。また、今回の推定範囲と谷をはさんだ南側にも、地形的によく類似した丘陵があり、図14に示した範囲の南部への拡張も当然予想され、今後とも調査が必要であろう。

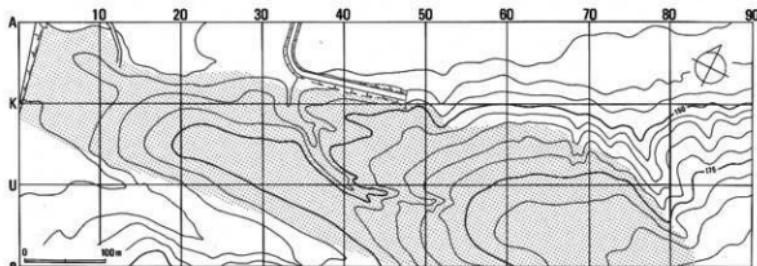


図14 美利河1遺跡の推定範囲（網点部）

## IV まとめ

前章までに述べてきたとおり、今回の調査により新たに38カ所の遺跡を発見・確認し、町内には現在のところ54カ所の遺跡が所在することになる。また、美利河1遺跡についてはその面的な括りを把握した。ここでは、これらの成果をふまえ、遺跡分布の在り方を時期的に概観し、若干の問題点にふれ、今後の指針としたい。

旧石器時代の遺跡は11遺跡あり、遺物は未確認であるが、花石1遺跡を含めると12遺跡となる。神丘・鈴岡地区、中里・花石地区、美利河地区の3つの分布域があり、とくに神丘・鈴岡地区における扇状地性段丘の東縁に旧石器時代の遺跡が集中する傾向がある。中里・花石地区、美利河地区においては、群といえるほどの遺跡数はないが、今後の該期の遺跡数の増加を待ちたい。

12遺跡の中で詳細な内容を知り得るのは美利河1遺跡と神丘2遺跡のみである。美利河1遺跡においては、発掘調査で得られている鉢下型、美利河技法による細石刃核、蘭越型、広郷型、ホロカ型の細石刃核に加えて、今回の調査によってオショロッコ型細石刃核が加わり、現在北海道で知られている細石刃核のうち、湧別技法による細石刃核、円錐形の細石刃核を除いてほとんどの型式を有している。また、細石刃文化に後続する有舌尖頭器、大形の尖頭器を中心とする石器群も検出されており、かなりの長期間に亘って遺跡が営まれていたと考えられ、今回明らかになった遺跡の範囲をも考慮に入れると、美利河1遺跡は町内はもとより道南地方の旧石器時代遺跡の一つの大きな拠点であったことが何われる。神丘2遺跡では鉢下型細石刃核を中心とする石器群が得られており、現在調査中である。美利河2遺跡においては詳細は知り得ないが、蘭越型細石刃核のプランク、細石刃、尖頭器がある。

今回の調査によって発見された遺跡の中で細石刃が採集されている遺跡は、神丘7・8遺跡、鈴岡1遺跡があり、神丘20遺跡では美利河1遺跡の上層の尖頭器に類似のものが採集されている。

縄文時代の遺跡については、採集できた土器片が小片または文様不明なものが多いため明確な時期区分はできないが、全体としては38遺跡を数える。早期では美利河2遺跡より貝殻条痕文、絡条体圧痕文の土器片が採集されており、神丘4遺跡において東釧路IV式土器が認められるにすぎない。前期では、網文式・春日町式と思われる土器片が神丘17遺跡に、円筒下唇式土器が神丘11遺跡に認められる。

中期から後期にかけて遺跡は急増し、神丘地区7カ所、田代・八東地区3カ所、種川2カ所が該当し、時期不明としたものも、ほとんどがこの時期に含まれると思われる。

晩期および統縄文時代の遺跡では、鈴岡1号洞窟が知られるのみである。

これらについては、今後も調査を重ね、各遺跡の明確な時期を把握し、縄文各時期の遺跡分布の在り方、占地の特徴などを解明していくなければならない。

統縄文時代以後の擦文期、アイヌ文化期の遺跡は発見できなかったが、これらの時期の遺跡は利別川下流域から河口にかけて分布する傾向があり（加藤他, 1976・畠他, 1980），上流～中流域での実態の解明は今後に残された課題である。

江戸時代寛永年間に松前藩によって開始されたといわれる利別川流域の砂金採掘については、美利河三股以外に、花石から種川にかけても行なわれていたらしく、砂金採掘のための水路、石垣、石積みが散見される。これらは、美利河1・2砂金採掘跡同様、段丘疊層の下に含まれる砂金を採集するために遠くから水路によって水を引き、疊層を洗い出し、砂金を選り分け、結果として石垣状をなす石積みが残されたものである。文献史料に乏しく、採掘技術面からのアプローチによる時代的な検証が必要と思われる。同時に今後、より体系的な分布調査を必要としている。

## 引用・参考文献

- 岡 孝雄・三谷勝利 1981 「今金町の地質」 今金町
- 矢吹俊男 1982 「美利河砂金採掘跡 2遺跡」 助北海道埋蔵文化財センター
- 矢野牧夫 1988 「黄金郷への旅」 北海道新聞社
- 長沼 孝・西田 茂・花岡正光 1985 「美利河1遺跡」 助北海道埋蔵文化財センター
- 千葉英一 1980 「瀬棚郡今金町美利河遺跡出土の旧石器時代資料」 北海道考古学第16輯
- 加藤邦雄・高橋和樹・内山真澄他 1976 「瀬棚南川遺跡」 瀬棚町教育委員会
- 峰山 錠・畠 宏明他 1980 「瀬棚内チャシ跡遺跡発掘調査報告書」 瀬棚町教育委員会